

# 大径木の高付加価値化に向けた取組の推進

## 資源活用第二課

【はじめに】

森林は、様々な種類、サイズの樹木で構成されています。

森林のタイプを大きく区分すると、自然の力で木が生い茂っている天然林と伐採跡地などにおいて人為的に植栽して造成した人工林に大別されます。道内の森林面積は民有林と国有林合わせて約554万ヘクタールで、割合は天然林が約7割、人工林

が約3割となっています。このうち人工林は、トドマツ、カラマツを主体とし、その他エゾマツなどの樹種で構成されています（図1参照）。

人工林の年齢構成（5年で1年齢）で見ると、10年齢（林齢46～50年）を頂点とした偏った構成となっており（図2参照）、林業を安定した産業としていくためにも、年齢構成の平準化が求められます。

北海道森林管理局では、地球温暖化防止を始めとする公益的機能の維持増進のための保育間伐等の森林整備事業を実施しています。



保育間伐実施後の林内

森林整備事業において伐採された原木は、土場に集積され、公売（委託で実施）や国有林材の安定供給システム販売（以下「システム販売」という。）により販売されています。

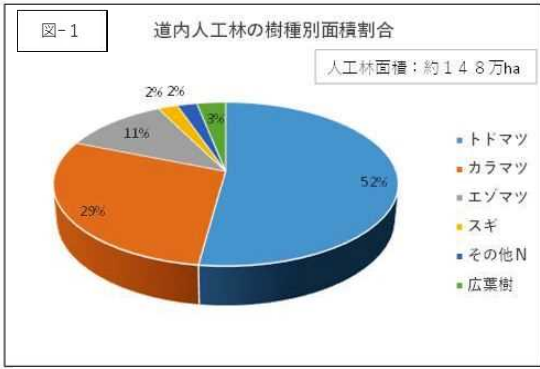


販売に向け丸太を桎積している様子

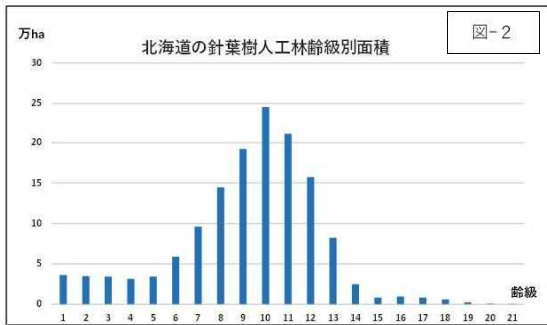
【システム販売における原木の安定供給】

北海道産のカラマツやトドマツ丸太の約5割が製材用となっていますが、その主な用途は、梱包材、パレット、型枠用桧木等の価格の安い産業用資材であり、価格の高い建築材としての利用は半分以下となっているのが現状です（図3参照）。今後、人工林の高齢級化に伴い、間伐から主伐にシフトし、供給が増えることとなる

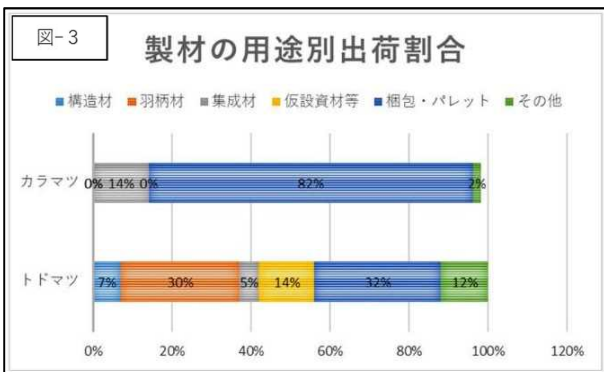
大径木の需要拡大と高付加価値化を進めることが、主伐後の造林経費などを捻出するために必要です。このため、令和元年度から、道産トドマツ・カラマツ大径木の高付加価値化とサプライチェーンの構築を推進する目的で、システム販売において大径材を供給する物件を設定し、公募する取組を実施しております。



北海道林業統計（R2年3月）データを加工



北海道林業統計（R2年3月）データを加工



木材需給情報（北海道R2年6月分確報）データを加工

図-4

安定供給システム販売で、大径材物件を供給する取組を実施。これによりドマツやカラマツの高付加価値化を推進。

○供給する原木

- ・径級26cm以上(需要者の要望する径級区分も可能)
- ・腐れ・空洞がなく、節や曲り等の欠点が極めて軽微

○申請の条件

- ・協定数量の半数以上を建築材として利用
- ・工務店、ハウスメーカー、プレカット工場等との連携

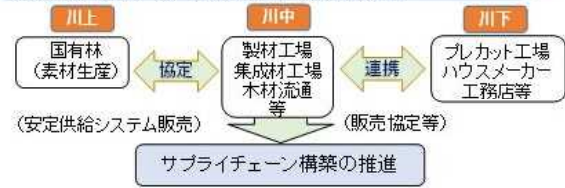


表-1

システム販売による大径材物件の実施状況

単位：立方メートル

年度	公募		申請		協定		備考
	件数	数量	件数	数量	件数	数量	
R1	6	3,100	6	3,100	6	3,100	
R2	8	1,000	5	700	4	400	
R3	9	1,100	4	500	4	500	8月30日現在



厳選されたトドマツ大径材(西紋別支署)



60cmのトドマツ大径材も(石狩署)



PF地区から出材されたカラマツ大径材(根釧西部署)

この取組は、一定程度の太さがあり、材質的にも優れた原木のみを巻立てして販売するものです。

用途については、協定数量の半数以上を建築材として使用すること、更にはサプライチェーン構築の観点から、協定者からハウスメーカーや工務店への販売が計画されていることをシステム販売申請の要件としております(図-4参照)。

【これまでの取組状況】

大径材供給の取組は、令和元年度にスタートしてから、毎年内容の見直しを行いながら継続し、今年で3年目に入りました。初年度は6物件、3千立方メートルを公募し、全て協定締結に至りましたが、2年度以降は公募の半数程度の申請にとどまっています(表-1参照)。協定を締結した需要者の方々からは、道産の良材

が安定的に供給されることを望む声や、品質の良いものを選別することで、工場の稼働が効率的に行える、といった声が聞かれました。

その反面、購入コストが高くなることへの抵抗感や、今後、特に供給増が見込まれるトドマツについては、角材に製材したときに割れが入りやすいため、無垢(接着加工等がされていない状態)で使用するのは難しいといった意見がありました。

【今後の課題】

現状では、システム販売の大径材物件への申請・協定は少なく、供給先は一部の需要者に限定されています。

今後、成熟していく人工林資源を有効に活用していくことは、森林の循環利用によるSDGsへの貢献にもつながります。そのためには、道内人工林の約半数を占めるトドマツの需要を拡大することが必要です。

製材時の割れなどの欠点はあるものの、成熟して大径木になるにつれて強度が増していくという需要者の声もあり、更なる乾燥技術等の進化により、品質向上が図られることも期待されます。今後とも、大径材供給の取組を継続していくことで、道産材の高付加価値化とサプライチェーン構築のきっかけ作りになればと考えます。

(※写真のPF地区とはパイロツトフォレストの略)